

## 県外避難者の復興曲線から考えること

宮本 匠\*

### 1 はじめに——復興曲線インタビューという方法

はじめて復興曲線インタビューを実施したのは2008年2月のこと、新潟県中越地震の被災地で私が復興支援にかかわっていた25集落26人へのものだった[宮本2008; Miyamoto & Atsumi 2011]。地震前から過疎高齢化が進む中山間地域を襲った新潟県中越地震では、復興とはそもそも何なのか、私たちが実現すべき社会、暮らしとは何なのかをあらためて問い直された。そのなかで、「復興とは何か」という問いが高まり、日本災害復興学会も設立されることになる。学者、支援者、専門家がさまざまに「復興とは何か」と問うなかで、そもそも自分が中越の被災地で出会っている被災した地域の人々が復興とは何かと問われたら、どのように答えるのだろうかというのが、復興曲線インタビューを始めたきっかけである。以後、阪神・淡路大震災、東日本大震災[宮本2015]、九州北部豪雨(2012)、さらに国外のインド洋津波の被災地であったスリランカや四川大地震の被災地でも実施してきた。また、この手法に関心をもった報道関係者や研究者がそれぞれの現場で、復興曲線の手法を活用して、一人ひとりの被災者の実に多様な声を取りあげてきた。

私がこの手法に手応えを感じたのは、ある理系の学者、専門家が集まる会合で、東日本大震災で被災した気仙沼のある一人の男性の復興曲線を紹介したときのことである。私は自分が復興支援の

現場で考えたことを、エスノグラフィーと呼ばれる物語にまとめることで発表してきた。しかし、私の力不足もあって、特定の被災集落の一人の被災者がどのように語ったのかという特殊性の強い話は、とくに一般性を重視する科学者や専門家コミュニティにおいて、相手にされなかったり、色物扱いされたりして、議論の題材にしてもらえないことが多かった。「〇〇さんっておじいちゃんがどうこう言った、って言われてもよく分からない」という反応も多かった。ところが、冒頭の会合では反応がまるで異なっていたのである。「どうして一つ目の曲線の谷と二つ目の谷では、同じ住宅に関することなのに深さが違うのか」「よくよく見てみると、この人の曲線が上昇するのは、いずれも誰かボランティアとのかかわりなんですね」「どうして住宅に関する支援なのに曲線を下げているのか」「住宅というのは雨風しのげるものという意味以上のものがあるんじゃないか」、このように会場の議論が大変盛り上がったのである。

復興曲線を媒介させることで、たった一人の復興について、大勢の人たちが「ああでもないこうでもない」とみんなで議論することができる。これがこの手法の強みではないかと思う。すべての復興に共通する一般性などそもそもない。それでも、復興曲線をみんなで議論していると、いくつかの状況においてはあてはまるような「部分解」のようなものが見えてくる。それはそのまま、復興支援のヒントとなる。さらに、そもそも私たち

\* 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科

は自分と共通するものを備えたものからしか、何かを感じとれないわけではない。実態はむしろ逆である。突飛な例に聞こえるかもしれないが、現代の私たちの生活と似ても似つかない時代に書かれたギリシャ悲劇や、源氏物語にさえも、私たちは深く感動し、考えることができる。それは、ある特殊な事象に対して、対になるのが、それら特殊な事象の間に共通するものとしての「一般性」だけでなく、一つの特殊な事象のうちにだけ存在しながら、それでも時空を超えて分有される「普遍性」があるからだ。この意味では、一つひとつの復興曲線から、「部分解」のようなものが得られるのと同時に、そもそも被災するとはどのようなことなのか、そのなかで生きるとはどのようなことなのかを考えることができる。本稿では、福島県から県外に避難してこられた方々の復興曲線について、これまでの他の災害との関連において共通するものと、県外避難者の復興曲線において特徴的であるように見えながら、しかし被災や生きることをめぐって、私たちが同じように問われている問題について書いていきたい。

## 2 不幸の連鎖をとめる

古部さんたちが聞きとってこられた復興曲線の一つひとつに目を通して、まず気がつくことは、2014年前後に、復興曲線の語り手自身やその家族が体調を崩していることである。病気になられることもあれば、鬱のように精神的な失調を抱えはじめる人もいる。これは、震災から15年たった阪神・淡路大震災の遺族の方々が描いた復興曲線と共通するものがある。災害直後よりも、数年たった後に、心身の不調を抱え始めるという「2番底」と呼ばれた傾向である。体調を崩した人の中にはそれが原因となって仕事を辞めざるをえない人もいる（もちろん、そもそも職場関係が原因となっていて体調を崩されている人もいる）。あるいは、家族の健康問題で、仕事を辞めざるをえない人もいる。仕事を失うということは、職場を通して得られていたなにかの人間関係を失うということである。さらに、誰かしらが病気になることで、さまざまな負担が家族にのしかかり、

病気が家族の中で連鎖していくということも起きる。健康を損なうこと、職を失うこと、収入を失うこと等々がきっかけとなって、住居を移さざるをえなくなる人たちは、そこでまたなにがしかの人間関係を失うことになる。このように、これら心身の不調の問題がより厄介なことは、それが次の損失、喪失へと連鎖していくということだ。

神戸の遺族の人々が描いた曲線にも、このような不幸の連鎖がみられた。そもそも、遺族になっているということは、家を失っていることを意味する。家を失うことが引き金となって、元のコミュニティから引きはがされる。かけがえのない家族を突然失うという悲しみに耐えきれなくなった体や心が「2番底」を経験する。心身の不調は仕事を失うことにつながり、その不調を一層深刻にしていく。このような神戸の遺族に見られた不幸の連鎖は、今回の避難者の復興曲線においても同様にみられるように思う。

さらに、天災と人災という違いはあれども、両者に共通しているのは、抱える問題があまりに深刻であったり、複雑であったりするように見えるときは、周囲の人間関係がどこか希薄になってしまうということがあることではないだろうか。家族を失った人に、どのように声をかけたらよいのか分からない。故郷を失った人に、どのように言葉を返せたらよいのか分からない。被災したことがない自分自身にとっても、この気持ちは分かるところがある。こうして、「遺族」や「避難者」は、腫れもののように映り、どこか近づけないものになる。ところが、本来、家庭、職場、友人関係などの持ち場持ち場によって、多様な顔をもち、異なる役割を果たす人間にとって、「遺族」「避難者」あるいは「被災者」と一面的なラベルのもとで、そのまなざしにさらされながら生きるとはとても辛いことだ。そのまなざしから逃れようとするとき、今度は当事者の方から、周囲の人々と距離をおくようになっていく。このように、「遺族」や「避難者」は、そもそもの出発点において、孤立してしまいやすい背景があるように思う。この背景のもとで、不幸の連鎖がはじまると、人間関係、つながりが一層希薄化していくことになる。

人間にとってあらゆる幸せの、そしてそのまっ

たく逆のあらゆる不幸せの源泉は、他の人間である「他者との関係」であり、さらに人間全体にとっての他者である「自然との関係」である。人間関係の希薄化は、避難者たちの暮らし、人生に喜びをあたえてくれたり、承認してくれたりする拠りどころを失うことを意味している。今回の関西の避難者への復興曲線インタビューで、それぞれに困難な状況にありながら、比較的関西出身者の人々の暮らしが良好であったことは、馴染みの土地で心理的負担も少なかったこともあろうかと思うが、やはりそうした人間関係が生活環境にあったことが大きかったのではないだろうか。すると、このような不幸の連鎖を、連鎖の果てに取り戻すことがきかないような結果を生む前にとめてしまうためには、避難先の土地出身でない人々にとっても、このような人間関係が結びつけられること、人間関係が回復されることが重要になるのだろう。

その意味で、復興曲線のなかで、曲線が上昇したきっかけとして挙げられる「避難者の会への参加」「避難者支援への参加」のような当事者との交流には、深くうなずけるものがある。また、一時的な里帰りについても同様である。今回の復興曲線は、このような当事者同士の交流や、一時的な里帰りによる旧来の人間関係の回復、維持が、不幸の連鎖をとめる非常に重要なきっかけとなっていることを明確に示している。避難者の間では、これら当事者の交流や一時的な里帰りを支える現在の制度（ふるさとふくしま交流・相談支援事業）が、そう遠くない未来に、打ち切りになるのではという声も聞かれている。特に、東京五輪を区切りに、東北の復興が高らかに宣言され、同時にさまざまな支援施策もなくなるのではないかという不安があるという。不安が現実化することのないように、避難者の現状がこのまま続いてしまううちは、これらの制度の継続が大変重要であることが復興曲線から分かることである。

### 3 理解されるということ

#### ——「する自己」と「ある自己」

これまで行ってきた復興曲線インタビューにおいても、曲線の上げ下げのきっかけとなる要素は

さまざまであった。住宅再建の進捗、家族の成長、家族や人間関係の善し悪し、健康、時間の経過等、これらの要素は、今回の避難者の復興曲線にも同様にみられるものがある。一方で、今回の避難者に大変特徴的な要素として、そもそも自分が避難という選択をしていることが理解されているか、尊重されているかという点があった。避難者の中には、当初、避難をしようかどうか迷っていることを周囲に話すと、変な人と思われたり、「精神科に行ったら」と言われた人もいた。福島に残っている家族から帰ってくるように言われたり、「いつ帰ってくるの」とたずねられた人もいる。なかには、「子どもを連れて勝手に逃げた」と言われている人もいた。復興曲線を見ていると、健康や人間関係の善し悪し以上に、これらのたった一言が、避難者を深刻に傷つけていることが分かる。精神科に行けばよいとか、勝手に逃げたという中傷的な表現はともかくとして、「いつ帰ってくるの」という一見穏やかな問いかけが、しかし、暗黙のうちに避難という選択を否定しているという意味で、やはり避難者を傷つけていることの意味を理解することが重要であろう。

避難者たちは、多かれ少なかれ、何かしらの葛藤のなかで避難を決断している。ここでの葛藤とは、自分自身のなかでもそうだし、身近な家族たちとの間でもそうだし、より広く社会においてもそうである。今回の復興曲線が、残念ながら如実に示してしまったように、現在の日本社会において避難を決断することは（特に「自主」避難を決断することは）トータルには肯定されていない。それどころか、否定的な見方をされることの方が多い。また、客観的な支援体制、サポートをみても、避難者が帰還者と同等のサポートがあるようには思えない。それでも、避難することを選んだのが、今回の復興曲線を描いた人々であろう。

多大な葛藤と困難のなかで、避難という道が選ばれている。それゆえ、ここでの避難という選択は、その人が生きていくなかで選び続けている無数の選択肢、決断のなかの「一つの選択」なのではなくて、その人が生きていくということそのものと重ね合わされた、存在のあり方そのものの全的な選択になっている。だから、避難していることの否定は、一つの選択肢の否定ではなく、相手

の存在そのものの否定になっている。だから、これらのたった一言が、これだけ避難者を深刻に傷つけているのである。

この避難者の傷つきのあり方を考えるために、「ひきこもり」について興味深い発言を続けている批評家、芹沢俊介の「存在論的ひきこもり」論を紹介したい〔芹沢2010〕。芹沢はまず、通常考えられているような、「ひきこもり」を社会参加ができていないという意味で改善されるべき問題ととらえたり、何らかの精神病的症候として治療の対象とする見方（「社会的ひきこもり論」と名づけられている）に異を唱える。この見方は、ひきこもる当事者を何らかの否定性でもってとらえている。この社会的ひきこもり論の見方がもたらす効果は三つだ。まず、「ひきこもり」が社会的にはあってはならない事態だという視点が留保される。次に、「ひきこもり」が治療の対象となることで、精神科医や専門家がその解決の主体となる。最後に、当事者やその家族には、「ひきこもり」という状態に対して自ら解決する力はないのだという無力感が強められる。ところが、そもそも「ひきこもり」は、存在への否定的なまなごしから自己存在を守り、生き延びるための手段として選ばれている。それゆえ、否定性でもって「ひきこもり」にあたる「社会的ひきこもり論」は、その否定性ゆえに、かえってひきこもりの原因になったり、ひきこもりを増やしたり、長期化させるというパラドックスがあるのだと芹沢は言う。

ここで芹沢は、まず「ある」を軸にした幸福感を重視しようという。それは、ものやお金を「もつ」ことで得られるものでもなく、仕事など何かを「する」でも、何かを「できる」ことによって成り立つ幸福感でもない、「お互いがいま・ここに・共にいる」ということへの肯定がもたらす幸福感のことだ。そして、「ある」という軸を前にした幸福感の前では、引きこもっている人と引きこもっていない人の間にひかれていた否定の境界線がいつのまにか崩れる。ここに、肯定性をもとにした人間関係が結ばれることになる。この肯定性をもとにしたひきこもりの見方が、「社会的ひきこもり論」に対して芹沢が論じる「存在論的ひきこもり」論だ。少し長くなるのだが、重要なので「存在論的ひきこもり」論の定義とされる箇条書き

を引用する。

- ①引きこもることは、本人にとって切実な意味と動機をもった一連の行為、すなわちプロセスのある出来事であるということ。
- ②それゆえ、引きこもるという行為はそれがなくは本人が本人でなくなってしまう、そのような体験であるということ。
- ③したがって、引きこもるという経験は、本人の人生上の一時期を構成する不可避的、ないし必然的な一コマとして位置づけられること。
- ④それゆえ、引きこもることは捨てるべき不毛な否定的経験などではなく、逆に人生の次のステップへ進むための大切な基盤となりうるということ。

この「引きこもる」という言葉を、「避難する」に置き換えてみても、ほとんど同様のことがいえるのではないだろうか。避難することには、本人にとって切実な意味と動機があるし、それゆえに、避難するということができなければ本人が本人でなくなってしまう。そして、避難することは、原子力災害を前にして避けることのできない経験であり、それは否定的な経験（だけにとどまるの）ではなく、逆に人生の次のステップに進むための基盤となり得るのだ。原子力発電所事故による放射能汚染という明確な原因のある避難者の傷つきを、ひきこもり論と並べて論じるのは限界があるのは承知なのだが、それでも自らの選択が社会から否定的なまなごしでもってみられるという事態とそれゆえに生じる困難に、両者は共通するものがあるのではないか。

この「存在論的ひきこもり」論には、さらに自己に関する重要な視点がある。芹沢は、精神分析家のドナルド・ウッズ・ウィニコットの議論をもとにしながら、自己には「する自己」と、「ある自己」があるのだという。「する自己」（社会的自己）とは、何かを「している」、何かを「できる」、何か「たずさわっている」、これらのことをもとに自分と社会を結びつけている自己のことである。引きこもることは、「する自己」からの撤退として理解できる。ではなぜ撤退するのか、それはその前に「ある自己」の危機があるからだ。「ある自

己」とは存在のレベルでの自己のあり方だ。「ある自己」を成り立たせているのは、内なる「環境と他者」への信頼である。この「環境と他者」への信頼は、原初的には母子関係において形成される。芹沢が依拠するウィニコットは、「子どもは誰かと一緒のとき、一人になれる」と一見矛盾することを言っている。

子どもはある時期から、お母さん（のような一番身近な他者）が見てくれていると思うと、一人でいられるようになる。客観的には一人でいるわけではないのだが、一人でいられる気分を得るようになるのである。やがて、このお母さんの視線が内在化されたとき、子どもは初めて、お母さんがいなくても一人でいられるようになる。内なる「環境と他者」への信頼とは、ここで内面化された「一緒にいる」ことができる他者のことだ。この内面化された他者の視点が形成されるときに「ある自己」が誕生する。内なる「環境と他者」への信頼が、外部世界を受け入れる容器となり、子どもは母親以外のさまざまな人とコミュニケーションをとることが可能になっていく。ところが、外部世界から否定されるままざしを浴び続けると、この外部世界を受け入れる容器が傷ついてしまう。内なる「環境と他者」への信頼が崩れるのだ。引きこもることは、このように外部世界からの否定的なままざしによって「ある自己」（存在論的自己）が傷つくことによって、「ある自己」を守るために「する自己」（社会的自己）が撤退することである。このように考えると、「する自己」と「ある自己」は並列関係ではなくて、「ある自己」が基底にあり、その上に「する自己」がのっていることが分かる。

芹沢は、「ある自己」の傷つきを再生するためには、その存在を全的に肯定してくれる「受けとめ手」がいることが重要だという。この「受けとめ手」は決して支援しようとするわけではない。支援は、対象を何らかの問題を抱えた人としてみているという意味で、否定性を根拠としているからだ。「受けとめ手」はただともに「いる」、「すすす」、ときに共に食事をする（芹沢はしばしばともに食事をすることで得られる喜びを強調している）。そして、「ある自己」が再生していくことをじっくりと待つ。決して、「引きこもり」から「引

き出す」ことをしない。

私は、避難者も多かれ少なかれ、特に今回の復興曲線インタビューで状況があまり良好でなかった人は、この「ある自己」が傷ついているのではないかと思う。このとき、もちろん現実として、「する自己」の支援につながるような就労支援、学習支援も重要でないわけではない（その避難者につながっていくという手段を確保しておくという意味で有意義である）。しかし、その前提として、避難という選択を選んで生きる避難者の「ある自己」を承認すること、否定しないこと、そして「ある自己」の傷つきからの再生を「受けとめ手」として、ともにいたり、過ぎしたり、食べたりして待つことが大切ではないか。ということは、「ある自己」の傷つきをゆっくりと時間をかけて癒やすために、安心できる住まいを確保しておくということは、雨風をしのげる住居ということ以上に大変重要だったのだと気づかされる。今回の復興曲線をみてみると、自主避難者への住宅支援が打ち切られたことに、あらためて疑問を感じざるをえない。

このように考えてみると、「理解されているかどうか」ということ、「ある自己」の傷つき、そして再生という問題は、そもそも原発避難者にだけ特徴的なものではないことに気づくことができる。たとえば、過疎高齢化という問題の俎上に載せられ、長年にわたって自らを否定的なままざしでとらえ続けてきた新潟県中越地震の被災地のような中山間地域の人々の復興にとって、自らの足下の豊かさをとらえ直すことが重要であったことも、「ある自己」の傷つきからの再生として考えることができる。天災と人災という原因によって、事情が異なることが強調されることも多いが、本質的に共通する部分はあるように思われる。さらに、原子力災害という極限的な状況における困難だからこそ、「『平常な』事例においては、アイマイなままに潜在化したり、中途半端なあらわれ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因が、より鮮明な形で顕在化している」[見田 2012] のだともいえる。天災と人災を切り分けて考えることが大変重要な局面ももちろんあるが、そもそも突然の不幸を経験すること、その経験を受けとめたり、そこから回復することはどのようなことか、

さらには、そもそも私たちが生きることができるとはどのようなことかといった問いについて、避難者の事例から考えさせられる普遍的なものがあるように思われる。

#### 4 おわりに

##### ——曲線が描けること／描けないということ

今回の復興曲線インタビューでは、復興曲線を描くことができないという人がいた。辛すぎて曲線を描くことができない、思い出したくないという理由で、曲線を描けない人は、これまでのインタビューでも存在した。最後に、復興曲線を描けるということ、描けないということがどのような意味を持っているのかについて、あらためて考えてみたい。

そもそも被災するとはどのようなことだろうか。ある日突然大きな不幸に見舞われることを人間はどのように経験するのだろうか。私は、被災という経験は、偶然性と必然性の二つの概念から考えることができると思う。まず第一に、被災をするということは、「なぜ他でもない私が被災しなければならないのか」あるいは「なぜ他ならぬあなたが死んで私が生き残ったのか」というように、圧倒的な偶然性、無根虚性を経験することである。ここで、「私」という存在が非常に不安定な状態におかれてしまう。ここでの「私」とは、先に述べた「ある自己」としての、存在のレベルにある「私」のことだ。被災者が、時に精神的な失調をきたしてしまうのは、その体験自体が悲惨であると同時に、その体験の理由が見当たらないことによる。だから、「被災すること」からの回復とは、何らかの形で自分の人生において災害がどのように意味を持つのか、その意味づけがなされるときに、つまりその「必然性」が獲得されるときに始まると考えられる。そこでは、そもそも自分の生を基礎づけてきた幸せや豊かさとは何だったのかがさまざまに形であらわされることになるのである。

復興曲線で描かれている曲線は、体温の上げ下げのように、客観的な復興感なるものが上下している様子をあらわしているのではない。そこで表されているのは、災害から現在に至るまでの被災

者の物語である。物語には、結末、オチがある。復興曲線では、それは被災者の現在だ。被災者の現在の視点を基準にして、被災後の無数の出来事から被災者の現在に関連する重要な出来事が選ばれ、そしてその出来事どうしの因果関係が語られているのである。だから、復興曲線が描けるということは、被災したということが何らかの形で自分自身の人生の物語において意味づけられているということである。それは困難からの回復の物語かもしれないし、より状況が深刻化していく物語かもしれない。あるいは、その悲しみと一緒にずっと人生を過ごしていくという決意の物語かもしれない。注意しなければいけないことは、曲線がなかなか上昇しなかったとしても、物語において、被災したことが何らかの意味づけがなされているのだとすれば、それはすでに「回復」に向けた一歩を踏み出し始めているのではないかということだ。だから、あらためて災害から今までの物語を復興曲線インタビューによって語ることは、被災したことの物語化を支えるという意味で、被災者の復興に寄与することもあるように思う。復興曲線を描いた後に、どこかすっきりとした表情で、「こんな風に過ごしてきたんですね」と語る人がいるのはそのためだろう。

一方で、復興曲線を描けないということは、自分の人生のなかで被災したことがいまだ意味づけを与えられておらず、それゆえに存在のレベルでの「私」が非常に不安定な状態にあるということを示している。「する自己」「ある自己」の議論に照らしていえば、「ある自己」を構成する内なる「環境と他者」への信頼が、突然の不幸によって失われているといえるのではないか。存在のレベルにある「ある自己」の傷つきには、それを何らかの欠如として否定性でもってとらえるのではなく、内なる「環境と他者」への信頼を回復するために、その存在をそのまま受けとめることが大切なのだった。つまり、「復興せよ」というまなざしで見つめるのではない社会全体としての受けとめと、より身近なところで受けとめる存在が重要だろう。これら深刻な状況にある人に出会っていくことは簡単ではないかもしれない。今回の復興曲線インタビューで、このような人たちと出会えた背景には、古部さんたちの交流会の活動や里帰り

支援の制度がある。避難者の「ある自己」の受けとめ手になれる人とその出会いを増やすためにも、あらためてこれらの取り組みが重要であると考えさせられる。

#### 参考文献

- 芹沢俊介『「存在論的ひきこもり」論——わたしは「私」のために引きこもる』雲母書房、2010年。
- 見田宗介『定本見田宗介著作集Ⅷ 社会学の主題と方法』岩波書店、2012年。
- 宮本匠「復興感を可視化する」復興デザイン研究、7、pp. 6-7、2008年。
- 「災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり——東日本大震災の復興曲線インタビューから」質的心理学研究、14、pp. 6-18、2015年。
- Miyamoto, T. & Atsumi, T., “Visualization of Disaster Revitalization Processes-Collective Constructions of Survivors’ Experiences in the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake,” *Progress in Asian Social Psychology*, 8, pp. 307-323, 2011.